

「移動」をめぐる文学的想像力

司会・講師	渡邊 真理香	(北九州市立大学)
講師	小南 悠	(関西学院大学・非)
講師	古川 拓磨	(大谷大学)
講師	桑原 拓也	(追手門学院大学)

「移動」というテーマはアメリカ文学研究の本流であって来た。『<移動>の風景——英米文学・文化のエスキス』(御輿哲也編著、世界思想社、2007年)、『<移動>のアメリカ文化学』(山里勝己編著、ミネルヴァ書房、2011年)、『アメリカン・ロードの物語学』(松本昇・中垣恒太郎・馬場聡編、金星堂、2015年)等の先行研究が示す通り、十分な研究成果をあげてきているので、アメリカ文学研究者の多くはこのテーマに食傷気味になっているかもしれない。

しかしながら、コロナ禍において「移動」を考察するという試みには一定の意義があるだろう。新型コロナウイルス感染症が我々の生活・生命を脅かし始めて4年目になろうとしている。感染拡大防止のための行動制限は世界的に見ると緩和傾向にあるものの、グローバルゼーションの中で人やモノが自由に「移動」していたコロナ以前の日常にこのまますんなりと戻れるのだろうか？長期間に渡る「移動できない」「移動したくない」という「停留」「固定」の感覚を抱いたことは、ある意味で「移動」への妄執にとりつかれた経験であり、我々に「移動」について再考する機会を与えてくれた。

もちろん、「移動」という言葉は多義的であり、「旅」「移住」「往還」「越境」「侵犯」「流動」「交通」等さまざまな言葉を連想させる。そのため、4名の発表者それぞれの興味関心は一樣ではなく、「移動」を狭義に捉えることはできない。また、議論はアメリカという地域を越える「移動」を見せるかもしれない。本シンポジウムは、ハーマン・メルヴィル、ジュリエット・コーノ、バレリア・ルイセリ、マックス・ヴァーノン等の作品を扱い、それぞれが「移動」をどのように描いているのかを、若手研究者たちの視線で探るものである。(渡邊真理香)

移動と固定の動力学——メルヴィルの「私と私の煙突」を読む

ハーマン・メルヴィルの人生は、文字通りの旅であった。若くして世界の海を周航したばかりでなく、転居を繰り返し、生涯にわたって各地を周遊したメルヴィルの人生は、〈移動〉の運動性に貫かれていたと言ってよい。実人生における作家の運動性は、『タイプー』(1846)などの初期小説から『クラレル』(1876)などの後期詩作品に至るまで、その文学世界をたしかに支えている。

そのような作家のキャリアと文学世界を概観するとき、1850年代にメルヴィルが相次いで物した短編群は、ひとつの特異点として浮かび上がってくるように思われる。「バートルビ

一」(1853)の表題人物にせよ、「ピアザ」(1856)のマリアンナにせよ、この時期の短編には一か所に留まる人々が描き込まれ、作品世界は〈移動〉のみならず〈固定〉の主題をも前景化するのだ。本発表では、そのような短編のひとつ、「私と私の煙突」(1856)を取り上げてみたい。

「私と私の煙突」の語り手は、日々忙しなく動き回る妻とは異なり、ゆるりとパイプを吹かし、物事を静観する。語り手が体現する静の性質は、煙突そのものが象徴する固定性と重ねられ、両者はともに動かざるものとして印象付けられる。しかしながら、その一方で、語り手は頻繁に住居空間を移動し、外を散歩し、ときに荒野を放浪するリア王の姿を自らに重ねもする。こうした語り手の行動と修辞が喚起する移動の力学は、作品全体を通して反復強調される語り手(と煙突)の固定性と一体いかなる関係を切り結んでいるのだろうか。

航海、旅、交易といった大きな移動の文脈から読まれがちなメルヴィルの作品を、家庭空間における小さな移動という文脈から読み解くことで、〈移動〉と〈固定〉をめぐるメルヴィルの文学的想像力とはいかなるものだったのかを考えてみたい。(小南悠)

Juliet Kono の *Anshū: Dark Sorrow*に見られる身体の「移動」と精神性の変容

ハワイ出身の日系アメリカ人三世の Juliet Kono (1943-)の長編『暗愁』(*Anshū: Dark Sorrow*, 2010)は、1940年代を時代背景に、日系アメリカ人二世の主人公 Aoki Himiko が10代で未婚のまま妊娠してしまったことから日本の親戚のもとへ送られ、そこで勃発する第二次世界大戦に巻き込まれていく姿を描く。ハワイのヒロから初め東京に移った Himiko は戦火が激しくなるにつれ、京都、広島へと渡る。肉親や恋人との別れ、親類の死、先祖の地である広島での被爆体験などを通して至った心情が、「いい知れぬうれい・そこはかとな、悲しい物思い」を意味する作品題の暗愁という古語に集約されている。

本発表では、ハワイから日本の各地へと移る過程で変化していく Himiko の信念や価値観と彼女に度重なる患難とを照らし合わせて検討する。そうすることで浮き彫りになるのは、病苦や死、別離、戦争、ゼノフォビア、人間関係の軋轢など、人生における数々の避け難い苦しみや悲しみに対して、必ずしも反抗したり忌避したりするのではなく、むしろ大観しかつ内省して受け止めるという Himiko の特異な態度である。これらの理解のために、本発表では仏教的観念を手がかりにしたい。浄土真宗本願寺派の僧侶でもある作者 Kono は、主人公が人生の儚さを認識する姿を通して彼女の仏教的成長を描こうとした、と認めている。

奔放に過ごしていた少年期のハワイから、最終的に広島に移り住むにしたがって次第に円熟していく Himiko の精神性変容の過程は、苦難を通してもたらされる暗愁との対峙の仕方とも呼応している。この東から西へと目指す地理的かつ精神的な動きや眼差しは、アメリカの frontier spiritに通ずると同時に、浄土信仰の持つ強い西方に対する憧憬との関連も認められるのではないだろうか。被害者対加害者の二項対立を超越する存在として解釈されてきた Himiko 像に、スピリチュアルな側面からの分析を加え発展を試みたい。(古川拓磨)

Valeria Luiselli, *Lost Children Archive* における難民の移動と文学的想像力

アメリカ＝メキシコ国境を不法に超える移民（難民）の増加は、アメリカ国内において長年の問題であり続けてきた。こうした問題に対して、ラテンアメリカ出身の作家が中心となり、フィクションやノンフィクションで応答し続けている。しかし、2020年にベストセラーとなった Jeanine Cummins による *American Dirt* が、事実の不正確さやエスニシティの観点から厳しい批判を受けたことが物語るように、難民ではない作家が難民について書くことの困難は、今日の世界で、以前よりも増しているように思われる。こうした非難民作家が難民についてのフィクションを書くことの難しさを背景に、本発表では Valeria Luiselli によるフィクション *Lost Children Archive* を取り上げ、彼女が難民をめぐる倫理的・道徳的な問題に応答し、難民の実際的な問題をいかにフィクションの枠組みに落とし込んでいるか、ということを示したい。そうすることで、当事者以外の人々が現実の問題をいかにして描きうるのか、という手がかりを示すことも本発表の目的である。（桑原拓也）

「コミュニティなんかいない」？

——*The View UpStairs* におけるクィアな時間移動の考察

ミュージカル *The View UpStairs* は実際に起こった放火事件をもとにした作品である。若手劇作家 Max Vernon が脚本・作詞・作曲を手掛けたこのミュージカルは2017年にオフ・ブロードウェイ初演を迎え、その後2018年にシドニー、2019年にロンドンに渡り、2022年には日本でも上演された。ゲイバーを狙った事件を描いている点で、劇中でも言及される2016年のオーランド銃乱射事件への追悼的作品として位置付けることができるだろう。

The View UpStairs が描くのは主人公 Wes の体験するタイムトラベルである。ファッションデザイナーとして有名になることに憧れる青年 Wes は、地元ニューオーリンズで自分の店を開くため、とある建物の内見に訪れる。火事の痕跡に不満を持ちながらも購入契約書にサインした Wes は、いつの間にか1973年に時間移動してしまう。Wes の購入した建物は、当時、セクシュアル・マイノリティの人々（特にゲイ男性）の集うバーだったのだ。本作品は主に放火事件が起こる直前の一夜を描いている。

このミュージカルは、コミュニティを重視する1973年の人々と Wes の出会いと文化的衝突を描く。実際のコミュニティよりも SNS に依存する Wes は、インターネットすら知らない70年代のゲイたちの寄り集まりを冷笑的に見る。しかし、「コミュニティなんかいない」と主張する Wes も、バーの人々の悲哀や苦悩に触れ、次第にコミュニティの重要性を実感し、自己欺瞞の克服に至る。

The View UpStairs はこのように、クィア・コミュニティのエンパワメントに注力した作品であるが、そのことは同時にセクシュアル・マイノリティの人々をめぐる状況が半世紀を経ても変わらないという絶望を突きつけてもいる。本発表では、Wes のタイムトラベルを考察し、本作品の政治的メッセージを検討してみたい。（渡邊真理香）